

国際ミツバチ研究協会



文献紹介

Bee World 76 巻 1 号 (1995) には、短報 1 編を含めて 3 編の論文が収録されている。Dreller and Kirchner はミツバチの聴覚についての総説で、基質振動以外は知覚できないといわれてきたミツバチがどのように音を聞いているのかを述べている。音によってミツバチの触角が振動し、この振れが触角の鞭節の基部に伝わる。その下方の軀節にあるジョンストン器官には触角を軸としてリング状に知覚細胞群が存在するが、これが伝えられた振れを感じ取っているらしい。

Matheson は、「世界のミツバチの保健 (増補版)」で、最新の地域別情報と、今回新しく旧ソビエト連邦の国々が調査した結果を加えた。取り扱っている蜂病は、前回 1993 年に当誌に掲載された 11 種類である。

Williams は、エストニアの養蜂の歴史を振り返っている。伝統的な養蜂から近代養蜂への切り替えが進み、第 2 次世界大戦直前にピークを迎え、戦争で壊滅し、戦後ソビエト連邦下で再生しつつあった養蜂も 1980 年代には農業における穀物など単一作物栽培の普及やミツバチヘギイタダニの被害で急激に衰退した。再び独立国家となった今、自由経済のもと、民間企業による市場開拓で今後の養蜂の復興が期待されている。

Bee world 76 巻 2 号 (1995) には、3 編の論文と Paxton による野性ハナバチの保全についての短報が収録されている。

Dietz と Vergara は、温帯地域のアメリカ合衆国でアフリカ蜂化ミツバチが生息できるかどうか予測した。一般的に熱帯指向のアフリカ蜂化ミツバチと温帯性のセイヨウミツバチには多

くの違いがあるが、セイヨウミツバチよりも防御能力が優れているアフリカ蜂化ミツバチはいずれ気候に順応しセイヨウミツバチのテリトリーを奪い、北米大陸での生息を可能にするだろうと結論している。

Wael らは人工飼育をしているマルハナバチの寄生蜂 *Melittobia acasta* の生態とその防除について述べている。この寄生蜂は繁殖力が高く、生活環が短く、多雌生産型であるために、寄生されたマルハナバチを救うことは困難で被害が拡大しやすい。防除策としては飼育室内での紫外線誘引トラップ設置を候補に挙げている。

Imdorf らは、ミツバチヘギイタダニの防除法として、合成殺虫剤を用いない簡便な方法を紹介している。この“Apilife VAR”はパーミキュライトの基材に、チモール、オイカリプトール、メンソール、およびカンフルを混合したものをしみ込ませてある。これを巣板の上に置くだけで効果が得られた。

Living with Varroa. Matheson, A. (ed) 1993. IBRA. pp. 58.

この小冊子はヨーロッパで被害が拡大しているミツバチヘギイタダニの問題をテーマに 1992 年にロンドンで開催された IBRA のシンポジウムの議事録である。ミツバチヘギイタダニに関して 8 人の著者が以下の 9 章を担当している；1. ダニとの生活、2. ダニの生態、3. ダニ寄生の被害、4. 化学的防除、5. 生物学的防除の将来、6. ダニ分布の拡大、7. 寒冷地でのダニの生態と防除、8. ダニ時代のイギリス養蜂、9. 今後の展開。

今後のダニ防除の方向性としては、既存のダニ剤の使用、有機酸と化学製剤の使用、生産物に影響を与えない天然物質による防除 (Apilife VAR や香草のタイムによる防除など)、生物学的防除法 (高温による) などがある。これらを課題としてダニ防除の研究に全力を上げることが提言されている。

(大澤華代)